

昼休み。

十二歳のジョシュは父親がアリゾナに転勤してきたのに従って、その学校に転校してきたばかりだった。

十六歳前後の五人の少女たちが廊下の角で彼を待ち構えていた。いずれもミニスカートの、黒いナイロンのストッキング、そして背中に「雌狐 (Vixen)」と縫い取りあるお揃いの黒いジャケットを着ていた。

ジョシュが彼女らのそばを通りすぎようとしたとき、五人はジョシュを取り囲むように近寄ってきた。

「あんた、いじめられたことある？」

リーダー格らしい少女が訊ねた。

「え？……いい、いや……」

ジョシュは身の危険を感じつつ、歩みを止めずに答えた。二人の少女が、ジョシュの行く手を塞ぐように立った。

彼の左側に立った少女が言った。

「人に質問されたら、立ち止まって返事するのが礼儀ってものじゃないの？」

「あの……急いでるんだけど」
ジョシュが言った。

「いいから、ローラの言うことを聞きな」

もう一人の少女が、最初に声をかけてきたリーダー格の少女を見ながら言った。ジョシュは振り返り、ローラという少女を見た。

「えと……なにか用？ ……食堂に行きたいんだけど……」

ジョシュはどもった。

「あんたをいじめてあげるって言ってんの」

ローラは平然と言った。

「な、なんで……」

「あんたを私たちの奴隷にするためよ。私たちがやれと言ったことは必ずやり、くれと言ったものは絶対に差し出す奴隷にね」

「そ、そんな……。ぼくに何をしろと……」

ジョシュは逃げ道を探すようにきよろきよろしながら言った。

「それは後で言うよ。その前に、あんたの金玉を膝蹴りする」

ジョシュはショックを受け、たじろいだ。彼はまだ十二歳で、夢精をするようになったばかりだった。そして、いわゆる「急所」についての知識は、セックスについての知識と同様、無知だったのだ。

「金玉、蹴られたことないんだろ？」

ローラは、もじもじするジョシュを見つめて言い、ほかの少女たちに合図をした。少女たちは両側からジョシュを捕まえ、壁に押しつけた。

「悪いけど、これはもう、やんないわけにはいかないね。ほんとうに玉を蹴られたことがないんだったら、それがどんなに痛くて苦しいものか、分からないだろうから。身に沁みて分からせてあげるよ」

ジョシュはもがいた。ローラは彼の頬に平手打ちを食わせた。

「動くな！」

ローラは叫び、それから静かな声で言った。

「覚悟を決めたほうがいいよ。どうしようもない痛みを味わうことになるんだから」

平手打ちのショックでジョシュは立ち尽くしていた。ローラは彼の肩を両手でつかみ、膝を思い切り後ろにはね上げ、それから全身の力をこめて、無防備なジョシュの睾丸を蹴りあげた。

強烈な一撃だった。ジョシュの睾丸は二つともローラの膝と腰骨との間で押し潰され、その小さな体を持ち上げられ、爪先立ちになった。

ジョシュは呻いた。急激に股間から凄まじき激痛が立ちのぼった。恐ろしい激痛だった。彼は、股間を手で覆いたかったが、両手とも少女たちに押さえつけられていた。

激痛は股間から下腹部へ、そしてみぞおちのあたりへと突き上げてきた。内蔵が火に焼けたように痛み、吐き気がこみあげた。

ジョシユは体を前に折り曲げ、何度も咳き込んだ。顔から血の気が引いた。激痛と嘔吐感に彼は苛まれた。

「こんなに痛いとは思ってなかっただろ？」

ローラは言った。少女たちがグスクス笑った。

「あんなちっちゃな玉を蹴られただけで、こんなに痛い思いをするのは、そうとうショックだろうね。私にとっては、こんなに簡単に男の子をやっつけられるんだから、ぞくぞくするけど」

ローラは、ジョシユを放すよう少女たちに身振りで命じた。ジョシユは廊下に転がり、両手で股間を覆い、体を折り曲げた。目が潤んでいて、いまにも泣きだしそうだった。

何もできなかった。パンツの下の二つの小さな玉から全身に放出される激痛のために、身動きすることもできなかった。痛み以外の感覚は失われたようだった。

少女たちは、泣き叫ぶこともできずに転がり悶絶しているジョシユを見下ろした。彼女たちは入学して以来何年もの間、何十回も同じように男の子の睾丸を蹴りあげて楽しんでいた。それは彼女たちの最大の趣味だった。

もちろん、彼女たちにはその苦痛は分からない。犠牲者たちの反応を見て推測するしかない。

だが、彼らの反応はあまりにも無残なものだった。そしてその後、彼らが彼女たちの言いつけにはすべて従い、持ってこいと命じたものは必ず差し出すことからしても、その苦痛の凄まじさは想像できた。

時々、少女たちは楽しみだけのために男の子を捕まえて股間を蹴りあげた。悪いこともしないのに地獄の苦しみを味わわれる男の子を見ることで、自分たちがより力強い存在だと感じられるからだ。

犠牲者たちは、少なくとも十五分は何もできずに地面を転がって悶絶する。少女たちはその姿を見るのが大好きだった。そして、蹴られた後は一時間は激しい激痛が股間に残る。少女たちは、彼らが痛そうに腰を曲げて歩いている姿を見るのも大好きだった。犠牲者たちは一生、その惨めな体験を忘れないだろう。

五分後、ジョシユはやっと回復した。まだ激しい痛みは残っていたが、思考力を取り戻し、身動きできるようになった。ジョシユはようよう立ち上がった。

「気分はどう？ 少しはよくなった？」

ローラが言った。

「さあ、次はタラの番よ」

ジョシユは顔をあげ、悲しげに顔を歪めた。ローラは嘲笑った。

「ぞくぞくするウ！」

タラという少女が、眼を輝かせ、ウォーミングアップするように脚を前後に振っていた。

ジョシユは再び両側から取り押さえられ、壁に押しつけられた。ジョシユはもがいた。だが、もはや抵抗する力は残っていなかった。

ローラが言った。

「これで終わりなんて思ったら大間違いよ。五人全員が蹴り終わるまでは、終わりじゃないんだからね。一休みして立ち直れたら、また地獄の苦しみが待ってる。それが五回つづくことになるの。どう？」

「や……やめて……」

ジョシユは哀願した。

「ごめんね。でも、授業は始まったばかりよ。最後までちゃんと勉強しなきゃ」

ローラは言った。

「タラ、用意はいい？」

「……な、なんでも……ということ聞くから……」

ジョシユは哀願しつつ、とうとう泣き出してしまった。

「もちろん、私たちの命令には絶対服従してもらおうよ。今後ずっとね」

ローラはタラに目配せした。タラはジョシユに近寄り、思い切り脚を後ろにはね上げ、膝を彼の鞞丸に叩きつけた。